在園や地域の子育て支援のあり方

講師　寺見　陽子　神戸松蔭女子学院大学大学院教授

1. はじめに

私の専門は子どもの発達心理学です。認知発達と自我の発達に興味を持って研究してきました。

子どもの自我の育ちには，人間関係が重要です。子どもの自我は，人間関係を通して育ちます。子どもが自分の存在を発見するには，周りの関わりが大切ということです。

地域も在園の子育て支援も，子どもが周りのものや人とのかかわりの中で，自分の内面をどう形成していくかを考えていくことが重要です。それは，親が親としての自我をどう形成するかということと関連します。

2. 子育てにおける今日の現状と課題

そこで，子の育ち，親の育ちに視点をおいて話をしたいと思います。

子育て支援の背景には，少子化，核家族化に伴い地域・家庭の教育力が低下し，座れない，人の話が聞けない，生活習慣が身につかないなどの子どもの育ちの気がかりさや子どもをどう育てればよいか分からない，関わり方が分からないなどの保護者の子育て不安が問題になっています。その一方で，女性の労働力の輩出など経済的な社会課題があります。

そうした中で，従来どおりの養護と教育を担うシステムでは機能しなくなり，どういう課題解決のシステムを作っていくか考えなければならない時が来ています。先日，子ども子育て 3 法案が可決されましたが，こうした課題解決に向けて，新たな仕組みづくりが始まろうとしています。

専門職の皆さんが，地域でコーディネーター的な役割をするとき，そうした新たな視点を持って取り組むことが求められます。そこで，私たちに何ができるのかですが，それは，新たな連携とネットワークが必要ということです。新たな連携とネットワークに取り組んでいくときにどういう方向で取り組んでいくかが，重要になります。

これまでの子育て支援施策は，いま子育て中のすべての家庭を対象に，妊娠期から大学生までの子どもとその家族を地域ぐるみで支援していく方向で発展してきました。子育て支援は，いま，赤ちゃんから子育てする世代になるまで支援していく循環システムとして構築されてきました。

支援をしていくためには，様々な機関，人々，地域の資源，そういった親子を取り囲む周りの資源をいかに活用していくか，その中には，保育園（所），幼稚園，小学校，地域の高齢者，若者も入っています。多世代型の子育て支援になっています。しかし，これだけのことをしてきても，少子化は止まらない，出生率は上りません。それをどう考えるかです。神戸で多世代交流，子どもたちと交流経験のある人がどのような子育て観，結婚観を持っているのかという，若者の意識調査をしました。大まかに言うと，小学校期に幼い子どもに関わりを持っていると人との関わりが安定しています。大学生になったときも，対人関係が開放的です。しかし，これは交流の成果なのか，もともとその人が持っていた気質なのか，因果関係はわかりませんが，そうした人たちは親との関係も安定していて，自分も親のようになりたいと思っています。また，子育てをどのようにしていきたいかを聞くと，女子学生のほとんどが，専業主婦志向です。この調査からは，専業主婦になりたいと思う背景は分かりませんが，いろいろな施策をしながらも，意識はあまり変わっていません。

このように見てくると，いまのここから本論ですが，なぜ子育て不安になるのかです。子育てを悩まない人はいません。子育ては悩みがあるものです。それが深刻になるかどうかはその人のパーソナリティと取り巻く環境にかかってきます。また，生活や就労の状況も大きく影響します。専業

主婦の人たちに子育て不安が高いことはよく知られている事実です。にもかかわらず，若者世代で専業主婦志向が強いというところに，不安の根源を垣間見るような気がします。

今日，子育ての不安をどう軽減していくのか，それが子育て支援の基本的なテーマになっていますが，結論を言えば，子育ての問題ではなく，その人が自分の人生を受容し，幸せ感をもっているかどうかということです。

３．保護者が抱える課題の背景

子育ての不安感とその軽減は今の保護者の課題と言われがちですが，その背景にあるものは，人間の生活の変化です。女性が働き，単家族になり，家族の機能が変ってきたということです。家族の機能には，性的，教育的，経済的，情緒的，保護的などがありますが，今日の家族の機能は，情緒的機能だけが肥大化しています。昔からのみんなで働いて，みんなで支え合っていく場ではなく，今日の家族は，外で働き疲れた自分を癒す場になっています。それぞれが部屋を持っていて，自分の部屋に入る，よく言えば個別の生活が保障され，悪く言えば孤立化した家族，お互いがつながることが難しくなっています。

今日，子どもが育てにくいのは，地域の人を通しての育児文化が伝承されてこないことにあります。そこで，マニュアル（育児書）に頼るようになりました。少し失礼ですが，マニュアルを取扱説明書と考えると，子どもに心が向くよりも，自分が取扱説明書どおりにできているかどうかに関心がいってしまいます。育児書を見て子育てすることは，子どもと向き合う環境が作りにくい，子どもが見えにくいということになります。子どもの内面への関わりではなく，どう関わるのかという外面への関わりになってしまいます。子どもとの向き合う関係が作りにくくなります。

子育てのスタートで大事なのは，子どもと親の融合性です。対象化された関わりをしてしまうと，初めから対面した関係になってしまいます。どちらがいいかということではなく，子どもの育ちから考えると，自分を丸ごと受け止めてもらって自分の存在を知る，それがとても重要です。子どもを対象化しない関わり方，融合化してみる視点は，対象化して見る視点とうまく切り替えないといけません。親になるということ，成熟した大人になるということは，視点をうまく切り替えることができることです。子どもと融合して一緒に遊ぶ横並びの視点と子どもが何をしているのか上から眺める視点と，危険を排除するために後ろから見守る視点など，子どもとの関係作りの中で，様々な視点で子どもを見ることができること，それが親の目線であり，親になる役割を獲得するということです。ところが今の若者に自分の親はどんな親かを尋ねると，友達のようなという答えが多く返ってきます。友達のような目線とは，共感して関わっていく横並びの関係です。それも大事ですが，時々は上から目線も大切だと思います。

4. 乳幼児期の子どもの発達と保護者の課題

乳児から幼児の親を見ると，子どもと一緒に遊ぶのがとても苦手です。一緒に遊ぶこと自体に子どもとの距離があります。子どもと関わるには，大人である自分の枠を超えないと共感的に関われません。自分の枠を超えるのは難しいことですが，親になるためには，その枠を超えて様々な自分でないといけません。

そこで，親の発達課題についてお話します。エリクソンという自我発達の研究者がいます。エリクソンは，人間としての自我が育つための発達課題を，１から８の段階に分けています。エリクソンはその段階に年齢を示してはいませんが，ほぼ，１段階は乳児期，２段階は幼児期前期，３段階は幼児期後期，４段階は学童期，５段階は青年期，６段階は初期成年期，７段階は成年期です。その発達課題を見てみますと乳幼期は基本的信頼感，幼児期前期が自律性，幼児期後期から小学校前期が主導性（積極性），児童期後期は，勤勉性を挙げています。その内容が意味していることは，「人間の力」の獲得の過程です。

可愛がられ，保護されて安心して育った子どもは，周りに信頼感を持つようになり，生きる「希望」を見出します。外に働きかけて，自らを表現することは相手に受け入れられることですから，自分が生きることは安心感に満ち，積極的にやりたいことはやっていいという肯定的なイメージが育つということです。そして，積極的に周りに

関わる意欲が育ち，こうしたいという意図が生まれてきます。それを「意志力」といいます。これが２歳ごろです。２歳児が反抗期になって自我が芽生えると言いますが，それはこういう発達をするからなのです。４・５歳になると，今日はこれをして遊ぶという「目的意識」を持つようになります。学童期になると，自分がやりたい目標があってそれに向けて自分の持つ能力と技術を最大限に駆使して「成し遂げること」が発達課題となります。自分はなし得る存在であるという「適格意識」が育ちます。自分が立てた目標に対して自分が誠実にすることが「勤勉性」です。

いずれにしましても，乳幼児期に大切なことは，生きる態度が育つことです。人との関わり方やものの扱い方，そして自分自身の扱い方を学ぶ時期です。いわば，方法を学ぶ時期ということができます。ですから，乳幼児期は知識の教育ではありません。

子どもは一人では育たない，この時期を保護し育成する大人の存在が必要です。エリクソンの論でいえば，６・７段階にいる人間が１・２段階の人間のそれに携わることになります。エリクソンの自我発達論の特徴は一人の人間の発達を示すと同時に，世代間の発達を示しているところにあります。この期の成人の課題は，「親密性」及び「生殖性」が挙げられており，それには，新たな自己を生成するという意味があります。

ところで，この成人期を迎えるまでの青年期に，人間は自分が何者かになり，それに自信をもって生きるという「自我同一性」を獲得しなければなりません。自己の生き方を主張する時期です。だから，この時期を第二反抗期ともいいますが，その次に迎える成人期には，仕事を持ち結婚して次世代を育てるという新たな課題に直面します。結婚し子どもを育てることは，出来上がった自分を次のステージにもっていく人生のライフイベントです。好きな人ができたら，その人のために自分をおさえて我慢できるでしょう。その中の最たるものが子どもです。未熟で場を選ばない，余儀なくされる，しかたないなと思う，それが自分の幅になります。自分の生活要求に応じた生き方をせざるを得なくなります。子どもによって，次のステージの自分が生まれてくるということです。そこには犠牲や葛藤が伴うものです。子育ては，「しかたないな」と，周りを受け入れて生きることを学ぶ場ということができるでしょう。

しかし，最近は違う状況があります。大人の側も他者のために生きることができにくい状況があるかもしれません。これまで合理的に自分のしたいように生きてきた，それなのに子どもができたとたんに「自己実現はこの次ね」というのは出来ぬ相談，これは現代人の課題かもしれません。子育て支援は，親の不安の軽減ということが上げられ，親が親になる，親の育児力を形成することが柱です。そのときに，かつての伝統的な親のあり方とか子育てはこんなものという価値の枠組みは，今は通用しません。保護者を理解し支援するとき，こうあるべきというものを想定するのは難しいことです。

保護者の課題は人間として生きることを考えると，今までの自分をちょっと横において他者のために自分の時間を使うことを通して新たな自分の生成をしていくことです。曖昧で自由な時代，自己選択で生きられる時代だからこそ，自分自身がどう生きていくかは自己決定と自己選択に委ねられています。しかし，それは，価値の多様化した今日，意外に難しいものです。「親になる」，そのあり方が，かつてのような社会的なモデルがあるわけではなく，男女共同参画の叫ばれる中で，これまでにないスタイルを夫婦で作り出していかなければならないからです。親の役割が曖昧で，家庭によって異なります。ですから，「親とは何か」ということを，形としてではなく，その本質を考える必要があります。親の役割とは，包み込むこと，ある程度子どもに葛藤を与えること，切り離すこと，これをうまく調整していくことです。それはかなりバランス感覚が必要です。情緒的につつみ込むこと（母性―優しくする人），物質的に切り離すこと（父性―厳しくする人），親になるということは自分自身の使い分け，目線の切り替えができることです。その役割に OK と言えればですが，母親の役割を求められているのに，意識的にはその役割ができないということになってくるとそれが不安になっていきます。生活上で

いえば，周りが思っていることと自分が思っていることとのズレがストレスになります。そこに不安の原型があるのならば，そのズレをどう調整するか，心理学的には，子育て支援の基本として考えたいところです。育児サロン，サークルなどはこのズレの部分を話すことで自分自身が自分を再認すること，周りが共感することで自分自身が安心するということです。保育参加は，モデルを見ることで自分を調整する，自然に学べる場です。保育園（所）・幼稚園の存在そのものが情報の提供になります。乳幼児期の成長を実際の活動を通して知ることができます。

子育て支援の一つの基本は保護者の不安軽減です。それがうまくいくと「まあいいかな」と思えて，安定的に過ごせる自己受容につながります。子どもの不安感につながらずに済みます。曖昧な社会の中で自分がどうすればいいのかが解かれば，自分の安心感につながります。

保育園（所）・幼稚園はフォーマルサポーター，地域のボランティアはインフォーマルサポーターです。両方の協力があってこそ支援がしやすくなります。保育園（所）・幼稚園が中心となって地域ネットワークを組むと個別的な支援ができやすくなります。家庭の中まで入っていけたらいいのですが，難しいことです。日本人は家の中に入ってこられるのを嫌がります。しかし，これからはそこまで考えないと，親としての役割を果たしていくためのサポートが十分にできません。

また，育児ストレスは，保護者自身の成育経験とも関連します。自分の親から非受容的に育てられた人は，対人関係が回避的になります。子どもの関係の回避的になる可能性があり，それは，育児の拘束感を高めます。そして，育児の当惑感を生むという連鎖が生じます。子育ては対人関係です。今，生きている子どもたちが親に受容されて生きることが大切ですし，対人関係が苦手な人がいたらそこを支援していくことが求められるでしょう。

そして，子どもとの親密な関係を築くための支援をしていくといいでしょう。つまり，対人援助が大切です。対人援助とは受容的共感的関係作りをどうしていくのかです。そのために親子遊びがあります。親子遊びの中で子どもとの関係が親密性を帯びたものになっていきます。家ではできない，はちきれる遊び，じゃれて群れる遊び，フィンガーペインティングのようなものと家でもできる遊びの両方を楽しんでくことが大事です。遊びは親子の関係の調節機能だと思います。親子関係の親密性を高めることです。親密性とは何かですが，様々なつながりを持つことです。親がはちきれることも大事です。専門性をもった活動を展開していこうとすれば，様々な遊びを組み合わせていってください。

育児不安は，保護者のバックグランドによって違います。学歴，健康状態など，普段のつながり自体を観察して，情報収集も大切です。一番大事なのは不安度の高さ，それは，育児ではなく人生に対する不安です。子育て支援という名目ですが，本来はその人がどんな人生を送っているのか，自分の今がこれでいいと思えるかどうかという自己肯定感が大事です。

5. 子育て支援における保護者の理解

信頼関係を作っていく中でその人の生活状況を聞いていくことが大事です。その人に興味を持って，その人が聞いて欲しいことを聞いてあげることです。これを「傾聴」といいます。保護者との関わりの基本は，傾聴と，心の鏡の役割です。その人が今何を考えどういうことを感じているのかを言葉にして返していくことが大切です。難しいことですが，大事なのはどこまで本音に入れるかということです。また，健康状態や就労の状況，人生観や育児観，性格傾向・不安傾向，自己注目度，子どもとの相性なども把握しておくと深い理解に繋がります。支援者としての私たちができることは，いかに保護者に共感・受容的に関われるかです。

課題を抱えた子どもの保護者の理解についてですが，我が子の障害を受容するのはとても大変なことと受け止めて，関わっていくことが大事です。また，障害がある子どもの発達を理解することも難しいですから，障害があるという見方で見ていると課題は解決しません。この子なりの関わりのパターンがあるという見方から入っていくこと，その子が外界にどのように関わっていくの

かを共に見ていくことができます。“年齢的なズレはあるが，障害があってもなくても子どもの発達は変らない”そういう視点から共に子どもの理解をしていくことが大事です。

保護者の子ども理解については，保護者が子どもというものを知らないことが案外多いものです。いろいろな子どもと保護者が関わる機会を多くして，知識ではなく子どもと関わり合う中で，子どもってこんなものという実感をもてるようにしていくことが望まれます。

6. 保護者・子育て家庭支援のポイント

支援の基本はウェルビーイングを高めていくこと，「I am OK」の気持ちになれるかどうかの視点で考えていくことです。

また，親になるプロセスに参与していくことです。子どもとの関わり，プロセスの中で親が親としての意識をもっていけるようにすること，他の保護者，子ども，先生方と出会う中で，自分自身がどうしようとしているのか自覚する場，機会，自分がどうありたいのかを見つめる場づくりを考えていくことです。そして，今のあるがままを受容し，親として生きることの自信と自分が今ここにいることのズレをどう調整していくのか，親としての養育力や役割の獲得が出来るように援助していくことが大切です。

そのためには，不安は不安として受け止め，解決しようと思わないことです。本音を受け止め，悩みは視点を変えてみることで，課題そのものは解決したことにならないけれども，ほっとして安心できる機会を作ることが大切です。それが，ウェルビーイングを高めていくことに繋がります。今を明日に向けて背中を押し，エンカレッジしていくことが私たちの役目ではないかと思います。

そのための学びの機会や家族の関係性の調整，父親の育児参加や地域関係のネットワークを作っていくことです。顔の見える関係，手作りでつむぎ合っていく，そこに子育て支援ネットワークの意味があります。組織ではなく，必要な時に必要な人が結びつくのがネットワークです。地域の子育て支援とは何かですが，小学校区単位で園（所）がカバーできるところをカバーしていってください。何がニーズであり，何を解決していくのかスタッフ間で課題を検討し合うことが大切です。

7. 専門性を生かした子育て支援の実践的視点

支援を振り返り見通しのある支援を考えていく場として，ケースカンファレンス等をお勧めします。

専門性を生かした保護者理解と対応を考えるとき，計画的で見通しのある支援が大切です。ソーシャルワークの技術を勉強する機会を持つとよいでしょう。しかし，計画的な見通しのある支援をすることと，よい支援ができることとはまた別です。計画的な支援が望ましい支援になるように，柔軟に調節しながらその人に応じた支援をするのが支援者の人間性だと思います。技術だけで人間は変りませんし，共感的，情緒的に関われればよいかというとそれだけでもないのです。計画的な見通しのある支援と，保護者それぞれに合わせた支援は，支援者の人間性によって調整していけるような，人間力が大事だと思います。

（本稿は，編集部で講演をリライトしたものです。）

共同機構特別研修会
平成２４年７月２６日
於：京都市子育て支援総合センターこどもみらい館